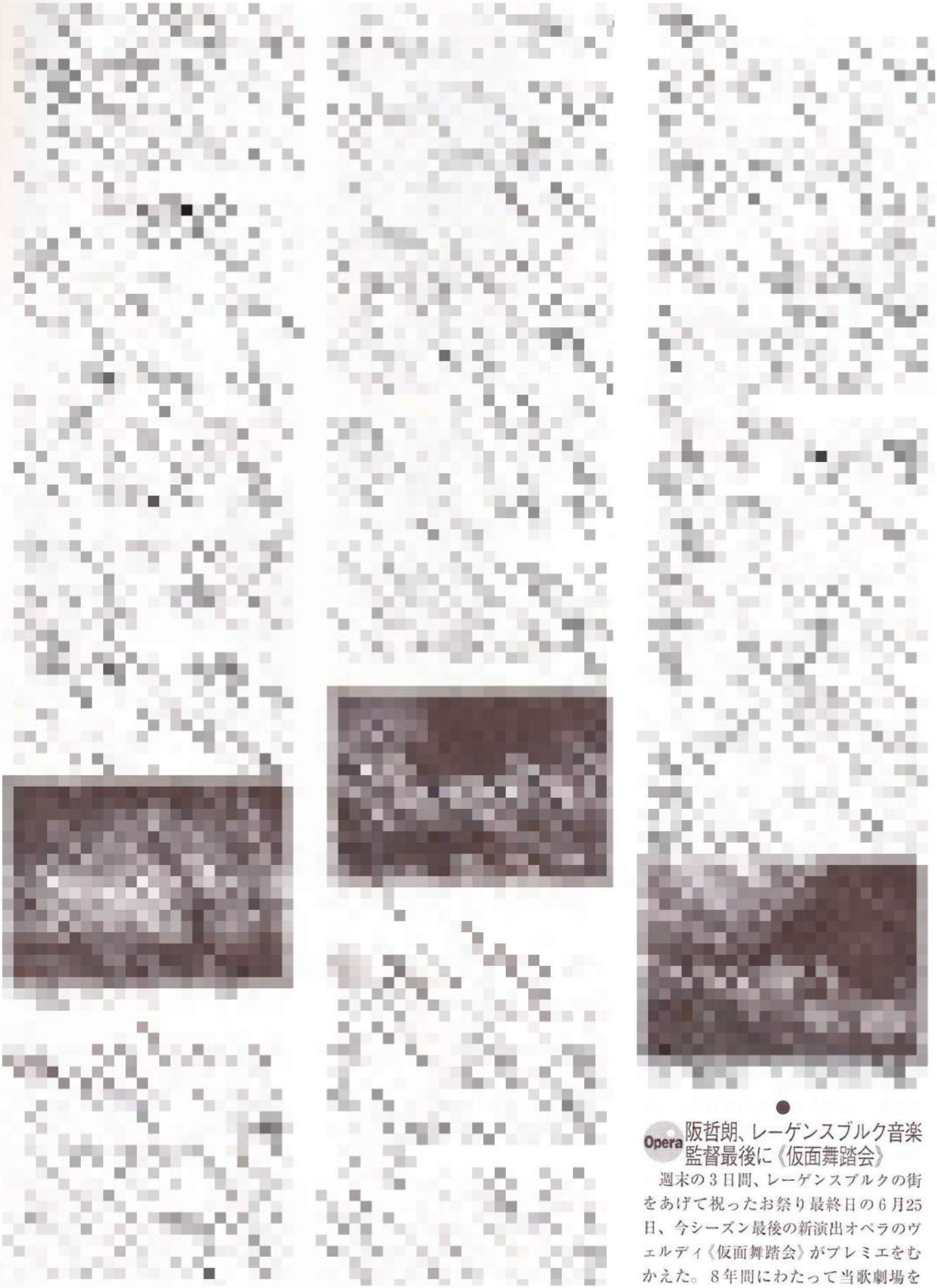

Opera 阪哲朗、レーゲンスブルク音楽監督最後に《仮面舞踏会》

週末の3日間、レーゲンスブルクの街をあげて祝ったお祭り最終日の6月25日、今シーズン最後の新演出オペラのヴェルディ《仮面舞踏会》がプレミエをむかえた。8年間にわたって当歌劇場を

率いてきた阪哲朗が音楽監督として「遺言」を残しながら稽古を進めたという。

読み替え演出で、マフィアの世界として描かれる物語を最初は失笑したが、阪が率いるオーケストラの端正な音楽と、歌手陣の決然としたパフォーマンスにより、このオペラにある、命で償わせたり、子供を誓約の担保にする件など、マフィアの掟そのものだと再発見させる説得力を帯びた仕上がりになっていた。

リッカルドのインジャ・ゴングの声は一流の素質を備えているが、ともすれば「野放しテノール」になるところを、要所で阪が手綱を締める。堕天使のようなオスカーのアンナ・ピザレーヴァは彼女の声の暗い響きを生かし、テオドーラ・ヴァルガは抑えた演技と阪が膨らませた歌のラインで「極道の妻」を好演していた。レナートのルシアン・ペトレアン、ウルリカのヴェラ・エゴローヴァも朗々と歌い上げた他、シルヴァーノのマティアス・ヴェルビッチュは歌も、殴られるシーンの演技も光り、特筆すべき重要な役割を果たしていた。

20年前にブランデンブルグ歌劇場第1指揮者としてこのオペラを振り、始まった欧州滞在型のキャリアを同演目で卒業し、これからは日本で振る機会を増やしていくという阪。日本人には楽しみだが、阪が高めた当劇場のレヴェルが、今後どうなっていくのか不安を禁じ得ない。

（中 東生）

音楽監督としての8年間を締めくくった阪哲朗

中央、リッカルド役のゴング、右はレナート役ペトレアン、左はアメリア役ヴァルガ ©Juliane Zitzlsperger